

論点資料補足資料

(学びに向かう力・人間性等、見方・考え方)

OECDにおける「態度や諸価値・非認知的能力」の位置づけ

- OECDのラーニング・コンパス※では、自分の人生と周りの世界に対して良い影響を与えることのできる能力等である「生徒エージェンシー」と、それを社会的な文脈の中で学び、育み、発揮する「共同エージェンシー」を中心的な概念として示す
- これらのエージェンシーを発揮し、自らの可能性を発揮できる方向に進むためには、「カリキュラム全体を通して学習するために必要となる基礎的な知識、スキル、**態度及び価値**」といったコンピテンシー育成のための中核的な基盤や、「より良い未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシー」を備える必要があるとされている

より良い未来の創造に向けた
変革を起こすコンピテンシー

Transformative competencies

複雑性や不確実性に適応し
より良い未来を創造できるよう
にするためのコンピテンシー

ラーニングコンパスの 中心的な概念

共同エージェンシー

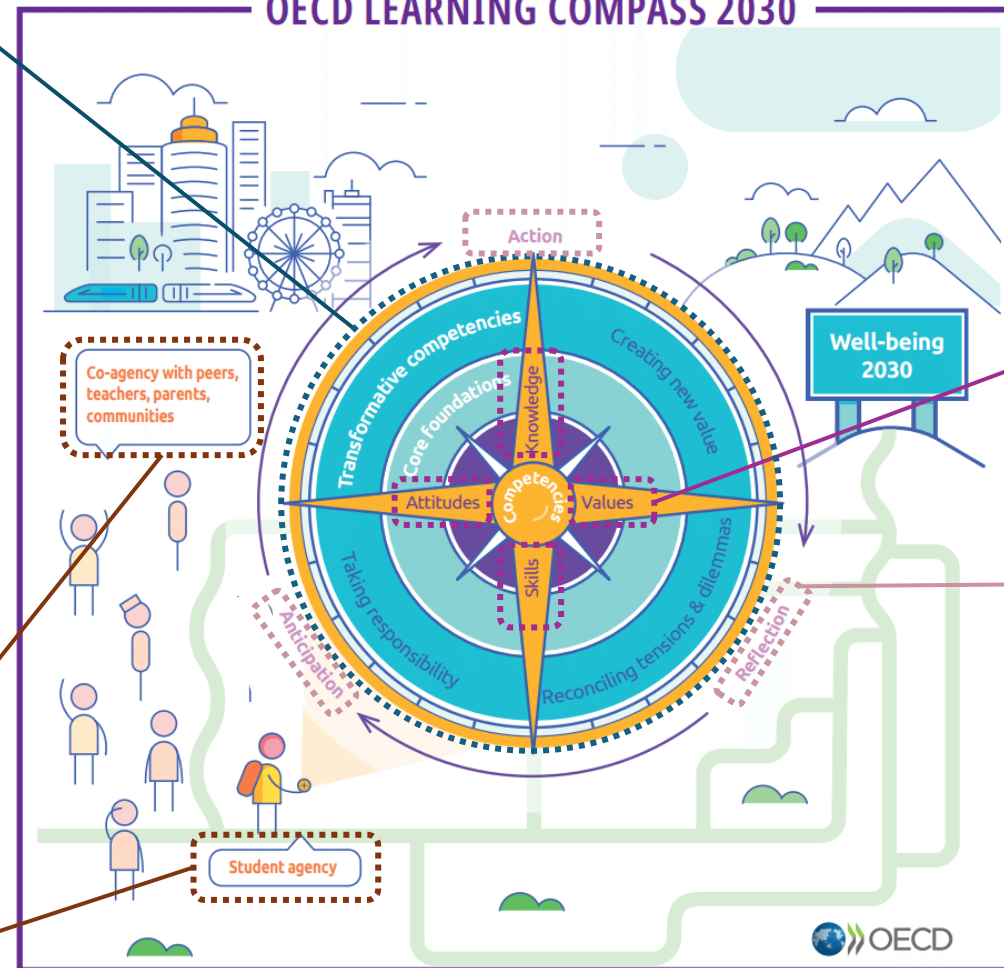
Co-agency
社会的な文脈の中でエージェンシーを
学び、育み、発揮すること

生徒エージェンシー

Student agency

自分の人生と周りの世界に対して
良い影響を与えることのできる能力、
意思、信念

OECD LEARNING COMPASS 2030



コンピテンシー育成
のための
中核的な基盤

知識
Knowledge

スキル
Skills

態度
Attitudes

価値
Values

より良い未来の創造に向けた
変革を起こすコンピテンシー
育成のための反復的な
学習サイクル

行動

Action

振り返り

Reflection

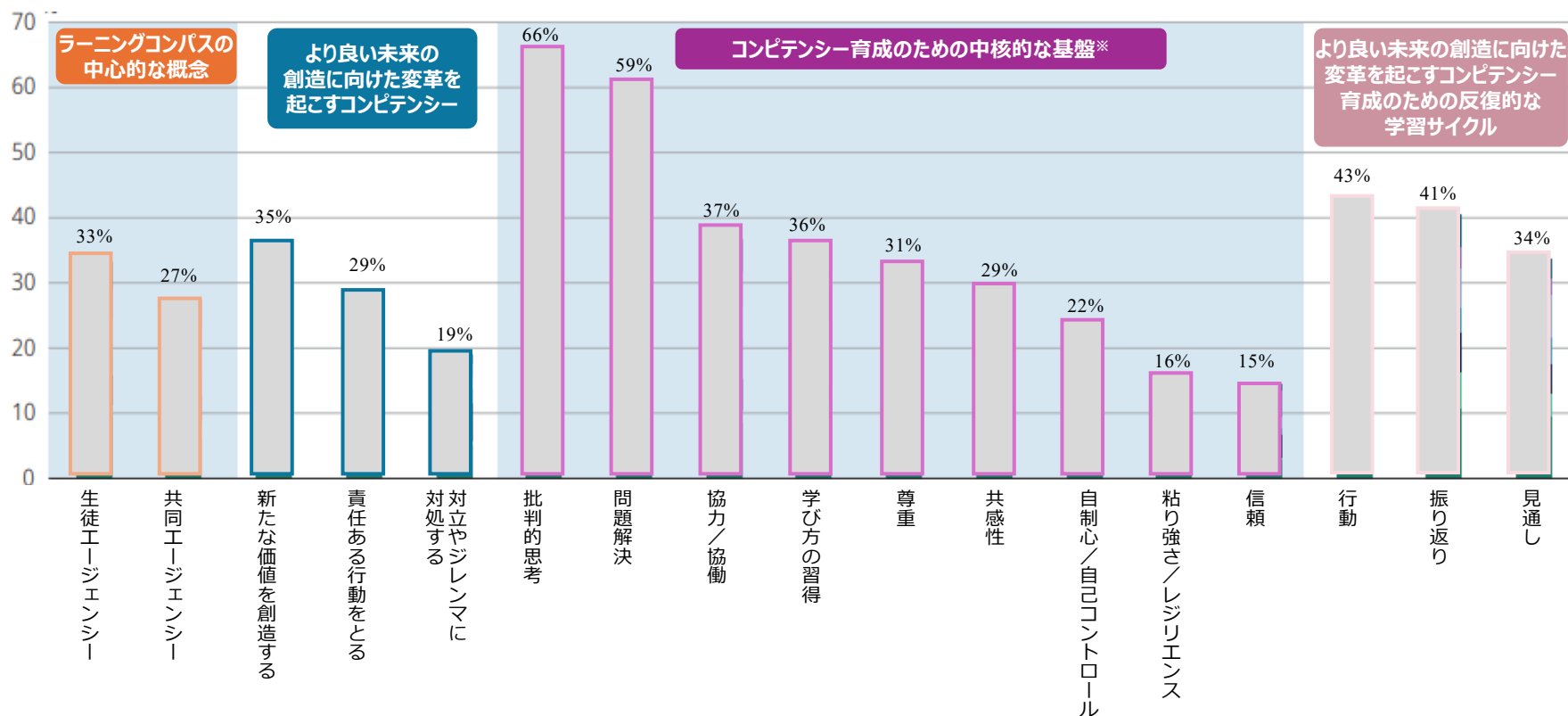
見通し

Anticipation

OECDが示す「態度や諸価値・非認知的能力」等の各国における位置づけ

- OECDのレポート※1によれば、教育課程の基準に「態度や諸価値・非認知的能力」に類するものを位置付ける国が多く見られる
- 「態度や諸価値・非認知的能力」は、ラーニング・コンパスを構成する前述の諸要素で整理されており、「生徒エージェンシー」、「新たな価値を創造する」、「批判的思考」、「行動」といった要素が多く国の教育課程の基準に含まれている

◆ 諸外国の教育課程の基準においてラーニング・コンパスで示す各コンピテンシー等が含まれている国※2の割合



※1：OECD「What Students Learn Matters TOWARDS A 21ST CENTURY CURRICULUM」（2020）を指す

※2：OECDが実施するカリキュラムに関するプロジェクトである「カリキュラムコンテンツマッピング」に参加しているオーストラリア、ブリティッシュコロンビア州（カナダ）、サスカチュワン州（カナダ）、エストニア、ギリシャ、イスラエル、日本、韓国、リトアニア、アイルランド（英国）、ポルトガル、スウェーデン、中国、カザフスタン、ロシア連邦が対象

※3：調査では、「コンピテンシー育成のための中核的な基盤」のうち、スキル、態度及び価値に該当する要素のみ対象とされている

（出典）OECD「What Students Learn Matters TOWARDS A 21ST CENTURY CURRICULUM」（2020）p.79図表より作成、仮訳

諸外国の育成を目指す資質・能力における「態度や諸価値・非認知的能力」の位置づけの事例①

- ・ 諸外国では育成を目指す資質・能力等の中に、「態度や諸価値・非認知的能力」に類するものを位置付けている事例が見られる
- ・ 「態度や諸価値・非認知的能力」は知識やスキルと一体的に示されている場合が多い

オーストラリア

オーストラリアン・カリキュラムにて示す、21世紀を生き抜くための7つの「汎用的能力」の中に、異文化理解、倫理的理解といった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

汎用的能力

- ・ リテラシー
- ・ ニューメラシー
- ・ ICT能力
- ・ 批判的・創造的思考力
- ・ 個人的・社会的能力
- ・ 異文化理解
- ・ 倫理的理解

カナダ（ブリティッシュコロンビア州）

児童生徒全員が学習に一層深く取り組むために育成が必要なコア・コンピテンシーの中に個人的・社会的コンピテンシーといった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

コア・コンピテンシー

- ・ 思考力
 - 創造的思考力
 - 批判的・省察的思考力
- ・ 個人的・社会的コンピテンシー
 - 自己認識と責任
 - 肯定的な自己認識・文化的アイデンティティ
- ・ コミュニケーション力
 - 伝達する力
 - 協働する力

韓国

育成を目指すキー・コンピテンシーの中に、自己管理能力、創造的な思考力、審美的な感性、公共体への貢献といった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

キー・コンピテンシー

- ・ 自己管理能力
- ・ 知識・情報の処理能力
- ・ 創造的な思考力
- ・ 審美的な感性
- ・ コミュニケーション力
- ・ 公共体への貢献

シンガポール

育成を目指すコンピテンシー「21世紀コンピテンシー」に、市民的リテラシー・グローバル意識・異文化間横断スキルといった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

21世紀コンピテンシー

- ・ 市民的リテラシー・グローバル意識・異文化間横断スキル
- ・ 批判的・独創的思考力
- ・ コミュニケーション・協働・情報スキル

諸外国の育成を目指す資質・能力における「態度や諸価値・非認知的能力」の位置づけの事例②

中国

児童生徒に育成を目指す資質・能力「中核的資質能力」の中に科学的精神、学び方の習得、健康的な生活、責任感といった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

中核的資質能力（核心素養）

- ・ 人文的知識
- ・ 科学的精神
- ・ 学び方の習得
- ・ 健康的な生活
- ・ 責任感
- ・ 実践力・想像力

ドイツ

全州に共通する学校教育の目的・目標の中に学ぶ喜びと学習成果の促進といった複数の「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

全州に共通する学校教育の目的・目標

- ・ 知識、技能及び諸能力の習得、必要なコンピテンシーを獲得
- ・ 学ぶ喜びと学習成果の促進
- ・ 自律的で批判的判断、自己責任ある行動、創造的活動の獲得
- ・ 自由と民主主義の承認、社会的活動と政治的責任への準備
- ・ 人間の尊厳と権利の尊重
- ・ 他者への寛容、ヨーロッパと世界の平和への促進
- ・ ヨーロッパや世界の交流プログラムに参加促進
- ・ 環境保全への責任と持続可能性を実践準備

フィンランド

基礎教育の3つの目標の中に、人として・社会の一員としての成長等といった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

基礎教育の国家目標（抜粋）

- ・ 人として・社会の一員としての成長
- ・ 生きるために必要な知識と技能（前半のみ抜粋）
 - 人間としての感情と欲求、宗教、生活観、歴史、文化、文学、自然と健康、経済と科学技術についての知識
 - 実践的スキルと創造性、体育の技能
- ・ 教育の機会均等の推進と生涯学習の基盤づくり

フランス

学校教育で育成する「知識・コンピテンシー教養の共通の基礎」（2015年）にて、感受性と意見の表現、省察と判別といった「態度や諸価値・非認知的能力」を位置付けている

知識・コンピテンシー教養の共通の基礎（抜粋）

- ・ 個人と市民の育成
- ・ 感受性と意見の表現
- ・ 規則と権利
- ・ 省察と判別
- ・ 責任、参加とイニシアティブ

OECDにおける「見方・考え方」に関連する概念の位置づけ

- OECDは、ラーニング・コンパス※の要素である「知識（Knowledge）」の中に、教科を学ぶ本質的な意義に近いものとして、「認識論的知識（Epistemic knowledge）」を位置付けている。



- 学問的知識**
(Disciplinary knowledge) : 数学や言語の学習で得られるような、特定の主題に関する概念や詳細な内容
- 学際的知識**
(Interdisciplinary knowledge) : 一つの学問/科目の概念や内容が、他の学問/科目の概念や内容に関連付けられた知識
- 手続き的知識**
(Procedural knowledge) : 何がどのように行われるか等に関する理解で、目標を達成するために必要な一連のステップや行動
- 認識論的知識**
(Epistemic knowledge) : 教科を学ぶ意義や、得られた知識を自分の生活にどのように活用できるのかといった知識

- 認識論的知識についての理解は、児童生徒が学問的知識を広げ、当該知識の理解を活用して問題を解決し、将来の価値ある成果に向けて意図を持って取り組むのを助け、時間をかけて幸福に貢献することを可能にする
- これにより、本物感が生まれ、彼らの生活や関心とのつながりが生まれる。児童生徒は、自分の知識をどのように活用できるか、また価値観や倫理に基づいた反省を通じて、どのように自分のコミュニティをより良い場所にできるかを理解することができる。知識を実生活の問題に関連付けることは、児童生徒の動機を高めることにつながる可能性がある
- 認識論的知識は、「この科目で何を学んでいるのか、なぜ学んでいるのか?」、「この知識を自分の生活にどのように活用できるのか?」、「この専門分野の専門家はどうに考えるのか?」（中略）といった質問によって促進される

※：教育の未来に向けての望ましい未来を描いた、進化し続ける学習の枠組みを指す

（出典）OECD「OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework SKILLS FOR 2030」（2019）より仮訳

前回改訂時検討と現行学習指導要領における「見方・考え方」の対応

- 文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」で示された「教科等の本質に関わるもの」は、現行学習指導要領の「各教科等の特質に応じた「見方・考え方」」に対応するものとして整理されている。

文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」（平成26年3月31日）（一部抜粋）

～（前略）今後更に教育目標・内容の構造の組み立て方や記述の仕方等を追究するとともに、本検討会の論点整理を踏まえた新たなモデルの構築を検討する必要がある。そのための一つの方策として、育成すべき資質・能力を踏まえつつ、教育目標・内容を、例えば、以下の三つの視点を候補として捉え、構造的に整理していくことも考えられる。

ア) 教科等を横断する、認知的・社会的・情意的な汎用的なスキル（コンピテンシー）等に関わるもの

- ① 認知的・社会的・情意的な汎用的なスキル等としては、例えば、問題解決、論理的思考、コミュニケーション、チームワークなどの主に認知や社会性に関わる能力や、意欲や情動制御などの主に情意に関わる能力などが考えられる。
- ② メタ認知（自己調整や内省・批判的思考等を可能にするもの）【補足1】

イ) 教科等の本質に関わるもの

具体的には、その教科等ならではのものの見方・考え方、処理や表現の方法など。例えば、各教科等における包括的な「本質的な問い」と、それに答える上で重要となる転移可能な概念やスキル、処理に関わる複雑なプロセス等の形で明確化することなどが考えられる。
【補足2、参考4】

ウ) 教科等に固有の知識・個別スキルに関わるもの

文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月21日）（一部抜粋）

（各教科等の特質に応じた「見方・考え方」）

○子供たちは、各教科等における習得・活用・探究という学びの過程において、各教科等で習得した概念（知識）を活用したり、身に付けた思考力を発揮させたりしながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう。こうした学びを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていく。

○その過程においては、「**どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか**」という、**物事を捉える視点や考え方も鍛えられていく**。こうした視点や考え方には、**教科等それぞれの学習の特質が表れる**ところであり、例えば算数・数学科においては、事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統一的・発展的に考えること、国語科においては、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることなどと整理できる。

○こうした**各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が「見方・考え方」**であり、各教科等の学習の中で働くだけではなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる。～

（中略）

○前述のとおり、「見方・考え方」には教科等ごとの特質があり、**各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐものである**。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる。